

セルフタイトルアルバムに込めたのは、
ライブハウスで芽吹いた3人の意志だった



Cover & Interview

SECRET 7 LINE

2008年10月に1stアルバム『How many lines does she hide?』、2009年4月に1st LIVE DVD『TOUR FINAL ACB Shinjuku 2.14.2009』、同年9月にシングル『1993』をリリースし、それぞれツアーを敢行。その間にも2度の中国ツアーを含む数多くのライブを重ねてきたSECRET 7 LINE。数多くのタフな経験は、SECRET 7 LINEというバンドの核となる意志を生み、その意志は数々の新曲となって新たな名盤を完成させた。2010年1月、2枚目にしてセルフタイトルとなる2ndアルバムをリリースするSECRET 7 LINE。彼らは今年、大きく飛躍する。

タフな経験、実り多き2009年

「観に来てくれた人が衝動に駆られるようなライブっていうか。それが理想的ですね」

●1stアルバム『How many lines does she hide?』リリース以降、バンドとしては非常に精力的に活動を重ねていますよね。前アルバムのリリースツアーを終えて、LIVE DVD『TOUR FINAL ACB Shinjuku 2.14.2009』（自主盤）をリリース。その後もツアーやライブを重ね、9月にはシングル『1993』をリリースしてまたツアー。その間もMXPXのサポートで中国に行ったり、BEYOND [THE] BLUEの来日ツアーをサポートしたり、数々のイベントに出演したり。2009年は非常に忙しい1年だったと思いますか、改めて振り返ってみると前アルバム『How many lines does she hide?』はどういう作品だったと思いますか？

TAKESHI: 1枚目に相応しい感じがしますね。あの作品の1曲目『Like a crash』は僕たちの代表曲だし。そこから始まるという流れもいいし、未だに自分でもよく聴いています。

SHINJI: ストレートに自分たちの中から出てきたような作品だったという気がします。当時はあまり深く考えてなかったんですよ。

●深く考えていなかった？
SHINJI: アルバム用に曲を書いたっていう感じじゃなくて、ライブを演っていく中で曲を貯めていて、そういう曲が大半を占めているアルバムなので。今から考えてみると、いい意味でも何も考えずに作ることが出来たアルバムなんじゃないかなって。なんて言ったらいいのかな…。

●その時の等身大アルバムだった？
3人: おお～!!

SHINJI: それっすよ！ 等身大のアルバム！ その言葉が欲しかった！

●普通の言葉だと思んですけど…ポキャブラリーが無さすぎる(笑)。

RYO: SECRET 7 LINEが始まってから1曲ずつ作っていったモノを凝縮したので、等身大のアルバムになったっていう感じですね。

●あっ、言い直した。バクッた。

RYO: 『How many lines does she hide?』をリリースする前もライブで地方と行ってたんですけど、やっぱりアルバムをリリースしたこととそれまで知らなかったお客さんが来てくれるようになったという実感がツアーではあったんです。

SHINJI: それにツアーで印象深かったのはやっぱりファイナル (2009/2/14@新宿ACB) ですね。

RYO&TAKESHI: ああ～、そうだね。

SHINJI: ツアーが始まった頃は、ファイナルがソールドアウトするとは想像もしてなくて、対(向)してくれただバンドもすごくいいメンツだったんですけど、『ソールドした』って聞いて『ええーっ!!』って。もう夢みたいな。

●そこを“夢”って言うちゃっていいんですか(笑)
SHINJI: いや(笑)、でも夢みたいな話が現実になったっていう感じでしたね。

●“自分たちがやってきたことは間違ってたかった”という実感があつた。

SHINJI: そうですね。それです。

●メンバーは以前もバンドの経験がありつつも、SECRET 7 LINEは2007年7月結成なのでまだキャリア的には2年半くらいじゃないですか。その中で、バンドのスタイルとかスタンスが変わってきたという実感がありますか？

SHINJI: 変わりましたね。最初と比べたらたぶん

全然違うモノになってると思います。ライブをやっていく中で変わった部分もあるし、前任のドラムが抜けてTAKESHIが加入したのが2008年5月なんですけど、今のメンバーになって変わった部分も大きい。

●なるほど。
SHINJI: TAKESHIはプレイも見た目もすごく激しいので、その影響でフロント2人も荒々しくなったり、激しくなったような気がします。最初はもうちょっと大人しかったと言うと変ですけど、今から考えるとガッツとやるようなスタンスではなかった。

TAKESHI: 前から来てるファンの子とかから『印象変わった』とか言われたことあります。前はもうちょっとスマートなメロディックっていう感じだったけど、僕が入って男っぽいというか、イカつい感じが出たのかも知れない。

RYO: うん。TAKESHIの加入によってバンドの印象が変わったのは確実だと思いますね。男汁が出てきたような気がします。

●男汁って。
SHINJI: 負けてられないですからね、TAKESHIのアグレッシブさに。だから“自分ももっとアグレッシブにならないと”っていう気持ちは自然と出てきつ、バンドが変わってきたんじゃないかな。

●お客さんとの関係性はどうか？
RYO: ライブに来て、一緒に楽しんでくれるお客さんがライブの後に話しかけてくれたりするんですよ。人によっては「おまえ、初めて会ったの何でそんなにフレンドリーやねん!」みたいなやつらも居るんですけど(笑)、でもそれやっぱライブハウスならではというか、そういうのも楽しいと思ってくれるやろからみんなライブハウスに足を運んでくれると思うんです。だからすごく嬉しいですね。

●ざっさ言ってましたけど、アルバムのツアーファイナルはチケッ트가ソールドアウトしたんですよ。そういう光景を目の当たりにしたら、やっぱり感慨深いモノがあるでしょうね。

SHINJI: そうですね。嬉しかったです。すごく嬉しかったです。

●…ざっさから全然ポキャブラリーが無いですね。一同: (笑)。

TAKESHI: ツアーファイナルシリーズの東名阪は3箇所ともソールドアウトだったんですよ。その場には今まで来てくれたお客さんも居たり、初めて来てくれたお客さんも居る。それまでのライブはよく来てくれるお客さんが中心…友達みたいな感じのノリだったんですけど、ソールドとかを目の当たりにしたらやっぱりプレッシャーも大きいんですからね。

●確かにそうでしょうね。

TAKESHI: 下手なライブ観せられないっていうか。もちろんそれまでもそういう気持ちはあったんですけど、アルバムツアーではそういった当たり前のことが再認識出来た。

●それによってライブに対する意識が変わった？
TAKESHI: うん。緊張するようになりました。前は全然緊張しなかったんですよ。

●確かにTAKESHIくんはそういうキャラのような気がすごいです。取材で初めて会ったときから物怖じしないでグイグイ来て、内心「なんでこ

んなにフレンドリーなんやろ？」って思ってたんですけど。

一同: (爆笑)。

TAKESHI: でもあのファイナルを経て、そこからはどのライブでも結構緊張しますね。

●それは悪い意味の“プレッシャー”というより、いい意味での“責任感”なんですよね。お客さんからの期待に対する。

TAKESHI: うん。そうだと思います。

●それと、最初に言いましたけど5月にはMXPXのツアーサポートということで、中国でライブをしますよね(中国2箇所、日本1箇所)。これはどういうきっかけ？

RYO: 話が出来たときは僕らもビックリしたんですけど、中国のプロモーター会社の人が僕らのことを逆指名してくれたっていうか。

●そこは逆指名じゃなくて指名でもいいと思います。実際に共演してみようだったんですか？

RYO: 若い頃からずっと聴いてたバンドと同じ場所、同じステージに立てるっていうのはまさに夢のひとつだったというか。MXPXは言ってみれば憧れの存在だったので、最初に声を掛けてもらったときはなかなか現実味がなかったんですよ、実感として。

●はいはい。

RYO: “楽しみなんだけどなんかよくわからない”みたいな。で、初日は上海だったんですけど、MXPXは飛行機が遅れて僕らの出発がまった頃にやっと会場入りしたくらいだったんですよ。僕らのライブが終わってバックステージに戻ってきたら、MXPXの楽屋からギター弾きながら歌ってるのが聞こえてきて。そこで一気に現実味を感じたというか。『うわー！そこに居るよ!』って。

●そこでやっと実感したんですね。

RYO: MXPXのライブに対する姿勢にも感激したんです。ギリギリの時間に行ってきた、リハも出来ない状況で始まったんですけど、手振りが一切無いライブだったんですよ。曲数も多かったし、お客さんに対しての近い感じがライブを演じているのを見て、すごいなと思いましたね。

●メンバーと話したりしたんですか？

SHINJI: 話しましたけど、何を話したかよく覚えてないんですよ。もう舞い上がっちゃって、フワフワしてました(笑)。いっしょに写真撮ってもらいました(笑)。

●アハハハ(笑)。

SHINJI: 基本的にファンなんですよ。僕らが10代の頃から第一線で作ってる人たちやし、観に行ったりもしてました。

TAKESHI: “MXPXのメンバーと会ったらこれいやるろ”って考えてたんですよ。それを散々考えて、実際にメンバーに伝えたら『Yeah! Yeah! ~』って色々話しかけてくるんですけど、英語だから何言ってるか全然わかんなかった(笑)。

●その時の反響が良かったということで、9月にも1度中国ツアーを行ったんですか？

RYO: そうです。また中国のプロモーターに呼んでいただいたんですけど、今度は僕らがヘッドライナーで。想像では僕らのことなんて誰も知らないだろうと思ってたんですけど、ネットで知ってくれた人とかが来てくれて、かなり盛り上がったんですよ。そこですごく得るモノも多かったし、また中国でライブしたいなと思いましたね。

●そういった中国のツアーも含め、DVDのツアーもあったし、シングルでもツアーをしていて…2009年はツアー三昧ですね。ツアーでは対バンから受けた刺激も多かったんじゃないですか？



[L-R] Vo./G.RYO Dr./Vo.TAKESHI Ba./Vo.SHINJI

を持ってしまおうとコードの流れに乗ってしまうんですけどね。それはそれでいいと思うし、そういう作り方をするときもあるんですけど、鼻歌から作るときが多いですね。

●**メロディック系音楽って、まさに言葉通りいいメロディなんですけど、日本人からしたら流れてしまうような感覚ってありますよね。でもSECRET 7 LINEのメロディは日本人っぽいというか、鼻歌で気持ちいいところを探していく感覚なんですか？**

SHINJI：説明するのは難しいんですけど。頭の中で常に音がまわってるんですけど。知ってる曲が流れてたりすることであるじゃないですか。それと同じような感じで、ふっとメロディが流れるってというか。そこで“あ、これいい！”って思う感覚があるんですよね、自分の中で。もちろん“これはいい”っていうのもいっぱいあるんですけど。

●**歌唱選択があるんですか。**
SHINJI：そうですね。それで“あ、これいい！”と思ったモノを形にしていってっていう感じ。

●**RYOくんの場合は？**

RYO：僕も同じですね。楽器を持って「曲を作るぞ！」っていうことの方が少なくて、僕はだいたいシャワー浴びてるときが多いんです。あとはひとりで車に乗っているときが多いです。

●**いいアルバムが出来たと思うんですが、“ライブでお客さんを巻き込みたい”という意識の下で作られた作品なので、やはりこのアルバムはツアーで完成するっていう感じなんじゃないか。**

RYO：ライブで完成だと思ってるんですけど、今回のアルバムは、

SHINJI：最後の1ピースをライブではめて完成させる、みたいな感じですよな。

●**あっ、バクってちょっとアレンジしたんですけど、RYO：1/22からツアーが始まるんですけど、やっぱりツアーには楽しみたいです。今回のツアーは今まで行ったこと無い場所にも行けるんですよ。**

●**今まで散々ツアーしてるのに、まだ行ったことが無い場所があるんですか。**
RYO：結構あったんです。そういうところもすごく楽しみだし、やっぱり気合いが入りますね。リリースツアーですから。

SHINJI：2枚目のアルバムを出したことによって、ライブでガッツンとアゲることが出来る曲が増えたんですよな。

●**武器が増えた感じですよな。**
SHINJI：2枚目のアルバムを出したことによって、武器が増えたんですよな。だから今までよりもっとアグレッシブなライブをしたいです。例えば今までだったら30分の中でもガッツンと盛り上がる場所もあれば、聴かせるような場所もあったり

歌詞の内容にしてもそうですが、“自分が作る音楽で色んな人に元気になってもらいたい”っていう場合は作曲の段階からライブ感が入ってます。自分でもライブで演ってる画をイメージしながら作ってるというか。

●**なるほど。シングル曲になっている「1993」ですが、タイトルも歌詞の内容も含めてちょっと意味深というか。どういうきっかけで生まれた楽曲なんですか？**

SHINJI：僕、子供の頃は身体が弱かったんですよ。中学校に入るときって部活というのは大きな事件というか、ひとつのトピックじゃないですか。

●**そうですね。部活は当時の生活のかなりの割合を占めています。**

SHINJI：それで、僕は医者から「スポーツの部活はダメ」って止められたんです。それがもうめっちゃショックで。

●**それはショックでしたよね。**

SHINJI：当時はスポーツが大好きで、野球とかサッカーもやってたし、それに当時は「スラムダンク」が流行ってたからバスケもやりたかったし。

●**なるほど。**

SHINJI：だから運動部に入ることが出来なくてすごくショックだったんです。でも、僕は昔から親に言われて色々習い事をしてて。バイオリンを習ってたんですけど、そういう流れもあって中学では吹奏楽部に入ったんです。

●**そうですね。**

SHINJI：それが1993年のことなんですけど、後から考えたらそこが僕にとって1生の分岐点だったんじゃないかなと思ったんです。音楽の道に進むスタート地点とかそのあたり。もし運動部に入ったらギターとかの楽器に触ってないかもしれないし。そういうことを思い出したりしてて、ちよとどそのときに出来た曲なんです。

●**なぜその時のことを曲にしようと思ったんでしょうか？**

SHINJI：なんででしょうね。やっぱりオッサンになったかなのが、昔のことを思い出すんですよ。大人になって親のありがたみがわかってたりかたし。子供の頃、習い事でバイオリンをやってた時はすごく嫌だったんですよ。バイオリンってなんかダサいイメージだったし、練習に行くのもしんどいし。でも親は「いつかあなたは“やってよかった。ありがとぅ”って言うから」と口を酸っぱくして言ってたんですけど、本当に言ってくた通りだったんですよな。だから敢えて歌にしようと思って書いたわけじゃないんですけど、自然な流れで曲になった感じですよな。

●**すごくいい話だ！**
TAKESHI：そうなんです。カットしたかったらして下さい。

●**わかりました。あと、歌詞についても伝わり易さというか、聴いてくれる対象を意識しているような気がして。もちろん全部英語調ですけど、サビなどの重要な部分でお客さんと対話しているような言葉を使っていたり。**

TAKESHI：僕は今回曲を作っていないので歌詞も書いてないんですけど、英語はしよせん外人の言葉ですから、耳で聴いて入っていくような歌詞ってっていう意識はあったんじゃないですかね、たぶん。

●**…TAKESHIくんは曲も歌詞も書いてないのに、曲の語になたら何も発言出来なくなるという危機感を抱いているのか、さきからちょこちょこ想像で発言してますよね（笑）。まあいいけど。**

SHINJI：やっぱり今まで自分が落ち込んだときとか、僕は色んな感情を音楽からもらってきたんです。

たアイデアがきっかけになってライブ感が出る要素が加わることもありますけどな。でもほとんどの場合は作曲の段階からライブ感が入ってます。自分でもライブで演ってる画をイメージしながら作ってるというか。

●**なるほど。シングル曲になっている「1993」ですが、タイトルも歌詞の内容も含めてちょっと意味深というか。どういうきっかけで生まれた楽曲なんですか？**

SHINJI：僕、子供の頃は身体が弱かったんですよ。中学校に入るときって部活というのは大きな事件というか、ひとつのトピックじゃないですか。

●**そうですね。部活は当時の生活のかなりの割合を占めています。**

SHINJI：それで、僕は医者から「スポーツの部活はダメ」って止められたんです。それがもうめっちゃショックで。

●**それはショックでしたよね。**

SHINJI：当時はスポーツが大好きで、野球とかサッカーもやってたし、それに当時は「スラムダンク」が流行ってたからバスケもやりたかったし。

●**なるほど。**

SHINJI：だから運動部に入ることが出来なくてすごくショックだったんです。でも、僕は昔から親に言われて色々習い事をしてて。バイオリンを習ってたんですけど、そういう流れもあって中学では吹奏楽部に入ったんです。

●**そうですね。**

SHINJI：それが1993年のことなんですけど、後から考えたらそこが僕にとって1生の分岐点だったんじゃないかなと思ったんです。音楽の道に進むスタート地点とかそのあたり。もし運動部に入ったらギターとかの楽器に触ってないかもしれないし。そういうことを思い出したりしてて、ちよとどそのときに出来た曲なんです。

●**なぜその時のことを曲にしようと思ったんでしょうか？**

SHINJI：なんででしょうね。やっぱりオッサンになったかなのが、昔のことを思い出すんですよ。大人になって親のありがたみがわかってたりかたし。子供の頃、習い事でバイオリンをやってた時はすごく嫌だったんですよ。バイオリンってなんかダサいイメージだったし、練習に行くのもしんどいし。でも親は「いつかあなたは“やってよかった。ありがとぅ”って言うから」と口を酸っぱくして言ってたんですけど、本当に言ってくた通りだったんですよな。だから敢えて歌にしようと思って書いたわけじゃないんですけど、自然な流れで曲になった感じですよな。

●**すごくいい話だ！**
TAKESHI：そうなんです。カットしたかったらして下さい。

●**わかりました。あと、歌詞についても伝わり易さというか、聴いてくれる対象を意識しているような気がして。もちろん全部英語調ですけど、サビなどの重要な部分でお客さんと対話しているような言葉を使っていたり。**

TAKESHI：僕は今回曲を作っていないので歌詞も書いてないんですけど、英語はしよせん外人の言葉ですから、耳で聴いて入っていくような歌詞ってっていう意識はあったんじゃないですかね、たぶん。

●**…TAKESHIくんは曲も歌詞も書いてないのに、曲の語になたら何も発言出来なくなるという危機感を抱いているのか、さきからちょこちょこ想像で発言してますよね（笑）。まあいいけど。**

SHINJI：やっぱり今まで自分が落ち込んだときとか、僕は色んな感情を音楽からもらってきたんです。

SHINJI：刺激は常に受けてますね。対バン相手は仲良いバンドが多いんですけど、そういう人たちがいいライブをしてたら悔しい気持ちになったりもしますし。

●**それはそうでしょうね。**

RYO：みんなすごくカッコいいバンドばかりなんですけど、個人的には例えばEGG BRAINとか…僕らと同じ3ピースでやってる人たち…から受ける刺激が大きかったと思います。影響を受けている音楽も近いだろうし。そういう同じライン上で活動しているバンドっていうか、そういう人たちを見ると嬉しいし、お互い頑張りたいなってすごく思います。負たくもないし。

●**なるほど。2009年はたくさんライブをやってきたと思いますが、どういうライブをしたときに満足度が高いですか？**

SHINJI：まずは自分が満足できるっていうか。そこが根拠はありつつ、観に来てくれた人が衝動に駆られるようなライブっていうか。それが理想的ですね。

●**お客さんを巻き込むっていう。**

意志を携えたセルフタイトルアルバム

「ライブでお客さんを巻き込んで、みんなと一緒にライブハウスで楽しめる作品を作りたい」

●**そういった2009年の経験というのは、今回リリースとなる2ndアルバム『SECRET 7 LINE』にすごく影響が出ていると感じますか。もともとSECRET 7 LINEはメロディセンスが抜群だと感じていて、で、今回の2ndアルバム『SECRET 7 LINE』を聴いたとき、ライブで培ってきた経験が全部強勁として形になっているような気がして。「観に来てくれた人が衝動に駆られるようなライブが理想的」というSHINJIくんの発言や、「アウェイでも普段通りのライブが出来るようになった」というRYOくんの発言が、今作を聴けば納得がいくと思うか。**

3人：あ〜。●**ひと言で「ライブを盛り上げる」と言っても、例えばMCでおもしろい話をして会場を盛り上げるだけとか。演奏中にお客さんを煽って盛り上げる、みたいな方法もあると思うんです。でもSECRET 7 LINEはそういう方法を選んだわけじゃなく、演奏する音楽でお客さんを盛り上げるにはどうしたらいいか？という志向の中で楽曲を作り、そういう曲が集まって今作が完成したんじゃないかなと。そういう印象を受けたんです。**
SHINJI：まさにそれなんですよな。

TAKESHI：その通り。
RYO：正解です。●**あ、正解ですか。じゃインタビューはこれで終了ということ…。**

3人：いやいやいやいや！

SHINJI：ライブを意識して楽曲を作ったというのはまさにその通りですね。

RYO：ツアーやライブは多かったですけど、その合間に曲は常に作っていたんです。LIVE DVD『TOUR FINAL ACB Shinjuku 2.14.2009』をリリースした後くらいから今作に向けて準備していた。だからライブの感覚をそのまま楽曲に入れることが出来たんじゃないかなって思います。

●**今回セルフタイトルじゃないんですか。2枚目に賭ける想いというのは強かった？**

RYO：そうですね。勝負したいっていう気持ちも強かったし、とにかくいい作品、尚かつライブでお

客さんを巻き込んで、みんなと一緒にライブハウスで楽しめる作品を作りたいっていう想いが強かったんです。そうやってアルバムを作り始め、最終的に出来上がったモノが自分たちでも満足出来るし自信がある内容になったので、セルフタイトルが適してるんじゃないかなと。

●**ささきも言いましたけど、各楽曲からライブを意識したということはすごく伝わってくるアルバムなんですよな。シングルにもなっている「1993」(M-6)やアルバム推し曲の『MY HERO』(M-3)は曲調自体が凄くしてライブではすごく盛り上がるだろうし、それ以外の曲もシンカログなパートがあったり展開がダイナミックだったり。“聴いた人を巻き込む”という要素が散りはめられている気がしますか？ それともアレンジの段階なんですか？**

SHINJI：曲を作る段階ですかね。

RYO：うん、そうやね。

TAKESHI：僕は今回曲を作っていないんですけど、曲を作る段階からライブを意識しているの、最初の段階でかけ声やコーラスのイメージまで見えてるんじゃないですかね、たぶん。

RYO：大体の曲がそうですね。

SHINJI：曲を作る段階で、例えば「ここはシンカログなパート」とか「ここはかけ声を入れよう」とかっていうイメージがある程度あるんですよ。だからアレンジする段階では曲をこねくり回さないでいうか。僕らの場合、もともと楽曲が持っている魅力をどれだけ引き立たせるかっていうアレンジをしているので。

●**なるほど。アレンジは色んなモノを足していくんじゃないって、むしろ楽曲を削っていくっていう。**

SHINJI：そうですね。まさに磨く感じですよ。RYO：うん、磨く感じですよ。TAKESHI：磨きました。

●**あっ、僕らもやってきた。**
RYO：僕らの場合、アレンジは“楽曲を磨く”っていうことを意識してやってるんです。

●**あっ、バクった。**

SHINJI：もちろん中には、誰かが後から持ってき